

『みかんの神様』

大内真哉

むか〜し、むかし。

それはもう、今や国民的人気の高い果物『みかん』が、
まだこの世に存在すらしていなかった程、昔のこと。

ある二人の男がいました。

「いや〜今日も山で、一人、芝刈りかー。
芝刈りも楽しいは楽しいんだけど、
最近、毎日同じことの繰り返しだなー。
こんなんじゃ、いつまで経っても、
有名人の桃太郎さんや金太郎さんみたいになれないよなー。。
うーん。。どうしたものか。。」

桃太郎や金太郎に憧れを抱きながらも、
どうしたら良いのか分からず、
とりあえず毎日芝刈りをしている「マコト」。

一方、隣町の別の山で。

「あ～あ、今日も山で芝刈りか～。

どいつも、こいつも、山で芝刈りだの、川で洗濯だのって。

何が楽しくてそんなこと毎日繰り返してるんやら。

って言っても、生きてく為にはやっぱ、

芝刈りするしかないよな～。。」

つまらない毎日に不満を抱きながらも、

生活の為に仕方なく芝刈りに励んでいる「ショージ」。

二人は、日々のルーティーン作業に違和感を覚えながらも、

どうして良いのかも分からず、

とりあえず、生きていく為に、

その他大勢の人たちと同じように山で芝刈りをする毎日でした。

そんなある日のことです。

二人の元に

一通の手紙が届きました。

この手紙を受け取ったそなたは幸せ者である。
なぜなら、最大の幸福を手にする好機を手にしたのだから。

これから、そなたにはある果物を生み出してもらう。
それが出来れば、とてもエキサイティングな未来が待っているぞ。
だから、ぜひとも頑張るたまえ。

ある果物とは『みかん』じゃ。

みかんとは、オレンジ色で、甘酸っぱく、
非常に美味しい果物じゃ。
実(み)の回りは皮で覆われており、丸い形をしてる。

それが『みかん』という果物じゃ。

己の力で『みかん』を1個で良いので、生み出したまえ。
1個生み出せば、そなたの人生の幸福は約束される。

みかんの神より

我々が生きる現代においては、
『みかん』は国民的人気の高い果物ではありますが、
この時代には、全くの未知の果物でした。

誰も『みかん』なんて果物は、
見たことも聞いたこともありません。

手紙を受け取ったマコトは。

「なんか胡散くさいなー。

そもそも『みかん』って何だ？聞いたこともないな。

オレンジ色で甘酸っぱい？

そんな果物をオレが生み出す？

うーん。。

なんかよく分かんけど、…

．．．

まあでも、…

ちょっと楽しそうだし、やってみるか！」

今まで見たことも聞いたこともない、
得体の知れぬ『みかん』という果物を作れ、
という、とんでもない手紙でしたが、

「エキサイティングな未来」というキーワードに引かれ、
マコトは、とりあえず、研究を開始することにしたのです。

その頃、同じ手紙を読んでいた隣町のショージは。

「胡散くせー！何だよみかんの神って！

てか、その前にみかんって何だよ！？

そんな果物知らねーし。

多分よくあるいたずらか何かだろう…。

．．．

いや、でも、…

みかんを生み出せば、エキサイティングな未来。か。

幸福は約束される、とも書いてあるし…。

よし！ちょっと怪しいけど、別に損する訳じゃないし、

騙されたと思って、いっちょやってみっか！」

同じ毎日に飽き飽きしていたこともあり、

ショージも、得体の知れぬ『みかん』という果物を生み出す為に、
研究に取りかかることにしたのです。

マコトもショージも必死になって研究を進めました。

雨にも負けず、風にも負けず、

雪にも夏の暑さにも負けず、毎日毎日必死で研究に励みました。←

二人とも、

何度も何度も失敗を繰り返しながらも、

山で色んな植物を採取しては、配合し、種を作り。

そして、それを植えては日々水を与え、

長い月日を掛けて実がなるまで育てる。

種を作っては、蒔いて、実がなるまで育てる。

種を作っては、蒔いて、実がなるまで育てる。

…

しかし、…

なる実は、緑色をしていたり、紫色をしていたり、…と、
あの手紙で言っていた『みかん』という果物とは、
似ても似つかないものばかり…。

「どうしたら、みかんという果物は作れるんだ…」

マコトもショージも

「たった1個のみかん」をどうしても作れずにいました。

二人とも何度も

「もうやめようか…」と思い悩むこともありましたが、

それでも、

『みかん』を生み出す研究を必死で続けました。

エキサイティングな未来の為に。

「山で芝刈り」の生活から抜け出したい一心で。

しかし、そんなある時でした。

二人の動きに差が生じ始めたのです。

マコトは、いつものように

「今日はどんなものを試してみようっかな♪

よし、今日はこれとこれを配合して作った種を蒔いてみよう！」

と、研究に励んでいました。

しかし、

その頃、隣町で、

「ちくしょー！またダメか…。

もうこんなにやっても出来ないんだ。無理だ…。

そもそも、あの手紙に書かれてることがウソだったんだ。

あんなものを信じたオレが馬鹿だった。

もうや～めた！」

ショージは、頑張っても頑張っても結果が出ない状況に
耐えられなくなり、

『みかん』という果物を作ることを

遂に諦めてしまったのです。

ここが運命の分かれ道でした。

その3日後。

「やったー！！遂に出来たぞ！！

オレンジ色で丸い形。

実(み)は皮で覆われていて、甘酸っぱくてとても美味しい。

完全にみかんだ！

これこそが、みかんだ！」

マコトは、遂に『みかん』という果物を
生み出したのです。

出来たのは、たった1個の甘酸っぱい丸い果物でしたが、
それは紛れもなく『みかん』だったのです。

マコトは、その1個の『みかん』を手にして思いました。

「これ、めちゃうちゃ美味いじゃん。
町のみんなもこれ食べたら絶対喜ぶぞ。
よし！
じゃあ、みかんビジネスをして、
この果物を世の中に広めよう！」

マコトは、『みかん』の素晴らしさ世に広める為に、
『みかんビジネス』を始めることにしたのです。

完全にゼロの状態から、みかん1個生み出すのは、
もの凄い時間と労力を要しましたが、

出来た1個のみかんを2個、3個、10個、100個、1,000個、…
と増やしていくのはとても簡単なことでした。

種の製造方法は、もう分かったので、
マコトは、それを何個も作り、畑に蒔き、育てました。

暫くすると、
何千・何万という大量のみかんが、
マコト家の畑を埋め尽くしました。

マコトはそのみかんを5個100円で販売開始しました。

そしたら、あれよあれよという間に、
畑からはみかんがみるみる減っていきました。

とにかく売れに売れに、売れまくる。

町のみんなは、今まで食べたことのない味に感動し、
その後も「みかん」を大量に消費するようになりました。

いつの間にか、マコトは
『大金持ち』になっていました。

みかんビジネスの勢いは留まることを知らず、
隣町のショージの元にまで普及していきました。

ショージは、初めてみかんを手に取り、
こんなことを思いました。

「あッ！！

これ！みかんじゃねーか！

オレが必死こいて作ろうとしてた、みかんじゃねーか！

みかんという果物は本当にあったのか…。

しかも、こんなに美味しいとはな。」

そして、
マコトという男がみかんビジネスで大儲けしているらしい、
という噂も聞き、

「チクショー！オレもあの時もう少し頑張っていたら、
今頃、億万長者だったって訳か…。
諦めるんじゃないかった…。」

みかん1個を作ることを諦めた自分をとにかく悔やみました。

「もう少し頑張っていたら…。」

その後、マコトはビジネスの楽しさを知り、
「みかんビジネス」で稼いだお金を使って、
また別の新しいビジネスを構築しました。

そして、そのビジネスで稼いだお金を使って、
更に新しいビジネスを構築し、

そして、そのビジネスで稼いだお金を使って、
更に新しいビジネスを構築し、

そして、…

．．．

…と、

山で芝刈りをしているだけでは絶対に得られないような
エキサイティングな日々を送ることが出来るようになったのです。

美人な奥さんとも結婚し、

二人の子どもにも恵まれ、暖かい家庭を築きました。

マコトは、

それはそれはもう、町一番の幸福な男になりました。

「今のオレは、桃太郎さんや金太郎さんのように
輝いているだろうか…。

そうだったら良いな。」

マコトは、そんなことを思いながら、

これからもエキサイティングな毎日を送る為、

そして家族の幸せの為に、

また新たなビジネス構築に向け、勉強に励むのでした。

めでたし、めでたし。